

## 書評：古賀一男 「眼球運動実験 ミニ・ハンドブック」

日本福祉大学 情報社会科学部 鶴飼一彦

眼球運動計測法の重要さは、眼球運動の研究分野できちんと認識されており、冷遇されているわけではない。その証拠に、多くの眼球運動全般の概説書には計測法の章が独立して設けられている。しかし、他の章の目的は、眼球運動の機序の解明や眼球運動の応用にあるわけで、計測法の部分と必ずしも共通した認識のもとに編集されてはいない。

しからは、眼球運動計測について専ら書かれた書籍はというと、なかなか見つからない。そのような書籍の重要さはわかっているが、自分の研究で使用しない方法も含めて網羅的にかける立場の人がほとんどいないためである。そのような状況の中で、貴重な書籍が出版された。

本書はミニ・ハンドブックとされているが、著者も記しているように、とてもミニとはいえないほど充実した内容を持つ。一読した感じでは、ハンドブックとしてよりも読み物として面白かった。眼球運動測定技術を網羅的に並べるのではなく、各測定技術がその研究史的な背景まで含めて述べられており、著者ならではの切り口が楽しめる。もちろん、眼球運動計測入門者にとっても基礎から最先端へと順を追って学べるため、非常に貴重な書籍であろう。図版も豊富である。2章のみに限っても80枚の図が用意されている。

第1章は、眼球運動の生理であるが、ここは、非常にコンパクトに必要な最小限の基礎がまとめられており、また、第3章は、実際の眼球運動測定装置を設置調整する際に必ず頭を悩ませる校正の問題が扱われている。残りの、本書の大部分は8つに分けられた、各種眼球運動測定法の話により占められている。

たとえば、2-7節のEOG法、私などはノイズや電極・皮膚接触の問題、両眼のクロストークの問題などで特定の簡易測定以外では最初から候補から外してしまう測定法について、このようなすべての問題点を解決する方法が述べられている。脳波の研究を経験した実験者が皮膚の脱脂を極端に行い上皮を剥取ってしまい、かえってドリフトを増加させること、両眼の水平眼球運動をクロストークなく測定するために必要な電極位置（眼球運動に興味を持っていて、これを知らない人は本書をただちに注文する必要がある）など、恥ずかしいことに本書を読むまで知らなかったことがたくさん見つかった。これらの理由も明確に述べられており、読んでみれば納得のいくことばかりであった。

眼球運動に興味を持つすべての人々にとって、手元に置いておく必要のある書籍と言える。将来、技術の進歩とともに新しい眼球運動計測技術が開発されようが、その場合には内容が追加され、ますます充実した書籍に発展していくことを願う。

### データ

ヒューマンサイエンス・フロンティアシリーズ-  
2000 [11]

古賀一男 「眼球運動実験 ミニ・ハンドブック」

引用文献 136 A5版 164頁 ハードカバー

(財)労働科学研究所出版部 1998年10月1日発行  
定価 1900円+税

### 目次

- 第1章 眼球運動の生理
- 第2章 眼球運動の記録と測定
- 第3章 眼球運動計測と校正